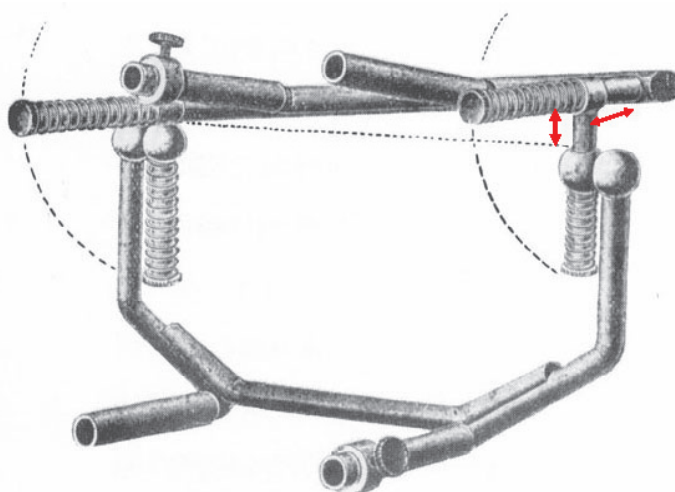


生体と咬合器 はたして口腔こそが最良の咬合器か

Schwarze 咬合器に想う

永田和弘

図は Bonwill 咬合器を改変したものの Schwarze 咬合器(1900<石原らによる>)で顎頭部が上下・前方に変位することができる 2 自由度咬合器である。もしこれに左右に変位できる機構を加えたら 3 自由度咬合器となるであろう。この Schwarze 咬合器を Walker は顎路傾斜度を見落とししているとして一蹴している。



Schwarze の咬合器 (1896 ?) : 9th international Medical Congress で発表 (Walker(1896))

Walker の一蹴には訳がある。あらゆる顎位を再現できるからといって、それがそのまま咬合再現装置として意味あるものにはならないからである。「Schwarze 咬合器よりも自由度が高い 3 自由咬合器であれば生体が示すあらゆる位置を再現できるから、より優れた咬合器であろうか。」のテーマは現代の我々に重要な示唆を与えてくれる。

顎頭はわずかな応力でその位置を変化させる。微視的に見れば、顎頭は無数の位置を占めることができる。位置と運動の経路は加えられる応力により変幻する。(この顎頭位の柔軟性についてはいずれ項を改めて確認事項としたい) あたかも総義歯において、変幻する顎堤粘膜形態を前に、術者は義歯製作の模型のためには唯一つの粘膜形態しか許されないのと同様に、微視的には変幻する顎頭位・顎路は咬合器上では唯一つしか許されない。顎頭の置かれた応力環境の中で、置いてはいけない位置や取ってはいけない経路がある。どの位置を重要視し、どの位置を取らさないか。どの経路を採用し、どの経路を採用しないか。咬合器は機械であるから、欲しい位置と経路だけを正確に何回でも再現してくれる。これは、生体や 3 自由度咬合器にはない特長である。咬合器は生体どおりに再現しないから生体よりも劣るのではなく、私たちが欲しいと考える位置と経路を正確に何回でも再現してくれるから、その点において生体よりも扱いやすいし、優れた点である。

顎関節症に対応する場合、病的な咬合位・運動を探ろうとしても、生体は病的な咬合位には無意識的に顎をもっていかない。生体ではできないが、咬合器上で原因歯を推察できることがある。生体は考えて、感じて、反応する。時には戸惑い、硬直し、試行錯誤し、頑なになる。咬合器はそれらが無い代わりに、使用する術者がどの位置とどの経路を採用するか考えて、感じて、反応しなくてはならない。口腔は術者が咬合器で製作したものを、口腔に戻して、

生体の審判を受ける場所である。製作手段（咬合器）と製作審判（口腔）とはその目的が異なるのである。口腔は最高の咬合器ではなく、最高にして最終の審判者なのである。咬合器は生体理解の具体的な哲学書であり、それを使用する術者は生体のどの部分を取り出してきて再現しているのかを追及する生体を考察する哲学者である。

終